
君と私の秘密。

エンナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と私の秘密。

【Nコード】

N4574W

【作者名】

エンナ

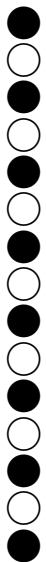
【あらすじ】

私、野田 茜は地味、暗いなどと嫌われ者。それでいい。・・・
目立つことが嫌いな私はメイクまでして地味な自分を作った――
―だけどそれが一番バレちゃいけないあいつにバレて・・・！？

バレちゃいました

「ええーっと……野田さん？」

彼は驚きを隠せずすっぴんの私を見ていた。



私、野田^{のだ あかね} 茜は一応普通の高校生。ただし、ある部分を除いて。

目立つのが昔から嫌いで、苦手でいろんなものを避けてきた。

そう、今まで。

中学校に入った時、メイクを覚え髪を伸ばし目立たぬような大人しくて暗くて静かな子を演じてきた。勉強はできるけど、体育がダメ。体が悪くて……と嫌われ、いじめられる子を作ってきた。大事なことなのでもう一回言うけど……そう……今まで。 つい、今まで。



私と彼・三矢^{みつや ゆうすけ} 祐介は暫く見つめ合っていた。

「祐介え？どした？なんかいたの？」

彼の友人が声をかけるまで、だ。

私は彼にジェスチャーで『教えないで』と伝え“あの彼”も理解してくれたようで友人にこういった。

「俺用事思い出したし、先帰ってて」

ナイスナイス。

友人が帰ったところで私は改めて彼に言った。

「お願い！誰にも言わないで」

「・・・・・・・・わ、分かってる」

しばらく沈黙が続く。沈黙の間、彼の説明でもしよう。

顔はなかなかのイケメン・・・・いや、十分もってのイケメン。

だけど、皆彼を「残メン」と呼ぶ。勿論訳があり・・・・。

彼は運動神経抜群、友達もたくさん！恵まれた容姿・・・・・・・・
だが。

頭がものすごく悪いのだ。

この間のテスト、5教科500点満点のテストがなんと合計70点。
結構簡単な範囲だったんだけどな・・・・。

「あの、野田さん！」

「え？あ、何？」

「今の顔って・・・・・・・・メイク？」

指さすな。やっぱりギャップひどいのかなー。

自慢じゃないけど、この顔で街中歩くとスカウトが必ずかかる顔。
モデルとかのね。

「ううん。これが素。いつものがメイクだよ」

「・・・・・・・・ッ」

三矢君は口元を抑えた。それほど衝撃スゴイかな・・・・。

「ね、えと・・・・・・・・裏門から出よう！バレなきゃ大丈夫！」

「・・・・・・・・うん」

彼はため息みたいな返事をした。ごめんね、被害者だね・・・・。

約束と残メン君

ここは近所の喫茶店。

例の残メン君とこれからの打ち合わせを行います！

「……ごめん、おごってもらって」

さすが残メン。

ゲーム買って無一文とは笑わせてくれるわね……。 おかげで今月ピンチじゃない……。 あ、なんでもない。

「ううん、いいの。それよりさっきの話だけど」

「……バラしちゃ……。 ダメなんだよね。じゃあさ」

何……。？ 交換条件……。！？

と私はハラハラしつつ「何？」と恐る恐る聞き出した。

「勉強教えてよ」

残メー……ン！！

私のハラハラ返せ！ びっくりしたあ……。 って別に変な妄想なんかしてないから！

「そ、それだけ？」

「うんっ」

つく……。 小学生みたいに無邪気に笑いやがって……。 ばかあ……。。



作戦会議終了。

喫茶店を後にした私は学校の知り合いに会わぬようにこそそと帰りましたとさ。



翌日。

無論私はいつもの変身^{メイク}をして登校。

「おはよ！野田さん」

・・・。。

何で話しかけてくるのよー！！！！

何とも言えないし、呼び出すことも今のカッコじゃ不可能なので思いつきり睨むと彼は思い出したらしく「あ・・・」と言っていた。

だからと言って周りの視線はもう払えない。
もうー！！バカバカ！残メンツ

私は思い切りトイレへダッシュした。

「三矢君ツツッ！！」

メイクを落とした私は早速怒りに行った。

誰もあの私だと気付いていない。

「昨日の約束忘れたの！？」

「・・・すいません」

「今度やったら昨日の君が言ったこともナシだからね？」

「・・・ごめんなさああい」

うぐっ・・・

そんな声出すな！私が悪いみたいじゃない！いいえ！悪くないわ！

「なあ、祐介、その人誰？」

「・・・えっ、ひ、秘密だよ・・・。自分で聞けばいいーじゃねーか」

「そーするわ。　ねー、君・・・っっていない！」
というところでチキンな私は逃げたとさ☆

やばいのとためらい

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・」

ただいま私たち・・・・とつてもやばい状態なのです・・・・。
同じクラスでしかも三矢君に恋心を抱いている彼女たちに出くわしたんです。

しかも場面が場面――！！



回想しよう。なんでこうなったのか。

いつも通り登校して、いつも通り授業を受けて・・・・。
そう、時間は放課後だったのです。

誰もいない校舎裏で私は彼の前でメイクを落としていた・・・・。

それがダメだったの！トイレに入ってすればよかった！！

偶然、そう、ほんとーに偶然！

彼女たちが現れたのでした・・・・。

超短い回想終わり。



「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・」

かしゅん、と化粧道具を落とす私。 割れた？関係ないわ・・・・。
今の状況で考えてられない。

そう、
バレた！！！！

しかもメイクは半分落ちてゐる。
確実に私だと断定できた。しかも男子じゃない。女子だ。噂なんて風のごとく広まるだろう。

「うあ」

どうしよう。　　ズズズズ　　どうしよう！

そんな目線を彼におく。……っておい。

例の彼……三矢君は呪いにもかけられたように硬直していた。
使えねえ。あ、じゃなかった。










逃げ場はない。

「ええーと」

女子陣の一人が口を開いた。

私は過剰にびくついてしまう。

「……あんた……いや……あなた誰ですか？」

やったー！ー！！気づいてない！？

「ばっかねー！うちのクラスの野田さんじゃーん」

やっだー！ばれてんじやん！

「ええー？ まじい？ それ素顔？ つぷつは！ マジうけるんだけどー」

えー、なにそれ、マジ日本語じゃないんだけどー。

なんて突っ込まない。私は突っ込まない。

「でえ？二人で何してた系？付き合ってる感じイ？」

私は「違うよ」とゆるく否定する。

「そおかあ、じゃあ、彼、借りてつていーいー？ちよつとお、用事あるんだよねえー」

ああ、はいはい好きにどうぞ。

「・・・いいよ」

・・・あれ？なんで私^{ためら}躊躇ったの？

日常

いつもふたりで勉強をする喫茶店で私は空だけ眺めぼーっとして
いた。

これでもう何分経ったかな。

「お客様？ コーヒーのおかわりはどうですか？」

「え……。あ、結構です。」

「分かりました」

そのバイトさんらしき人はニツコリと微笑んで次のテーブルへ回
った。

空が青いな……。今彼、何してるのかな。きっと告白でもさ
れて付き合ってるんだろうな。

だってさっきの子私より可愛いし。ううん。私なんて大人っぽい
だけで可愛くなんかないもんね。

あーあ、自己嫌悪。ネガティブすぎるよ、私。

と今日で何回目かわからないぐらいのため息。

カランコロン、とドアがあく。

この音も何回目だろう。

「野田さん！」

……。へ？

「ああ、いた！」

み……。三矢……。くん？

「ななな、なんでここにいの！？」

「え？ いるかなー、と思って急いできたんだけど……。あ！ 店
員さん、俺にもコーヒーください」

それだけ言うと彼は私の目の前に座った。

「そーじゃなくって！ 答えになってない！」

「……さっきの人達の事？」

「……うぐ……そ、そうよ」

「断ってきたんだ」

「は？」

断ってきた？何を？

考えていることと同じことを私は彼に聞いた。

「付き合ってたって言われたんだ」

……。そだよ。私馬鹿みたい。あの流れじゃ絶対。

「『こんな馬鹿な俺でもいいの？勉強教えてくれるの？』って聞いたんだ。

なんか相手も頭悪いらしくてさ『勉強は……』って口ごもったところを断ったんだ」

ふうーん……。

「ね、そんなことどうでもいいからさ、英文教えて欲しいんだけど」と、教科書とノートを取り出した。

いつもと同じじゃない。何だかなあ。

私はクスリと微笑んで「で、どこするの？」と問う。

彼はいつもの無邪気な笑顔を向けて「ここ、ここ！」と言った。

そっか。この日常、まだ続くんだ。

と、心のどこかでホッとしている私がいた。

メイクと学校

あの日（三矢君の告白された日）から数日経った今日。
私はある異変に気づいていた。

「・・・・・・・・嘘」

いつもの近場の葉屋さん。そこでメイク道具を買っただけど――
「・・・・・・・・都合により店を閉めさせて頂きました。本日まで誠に有難うございました」・・・・・・・・「?!」

どどどーしてくれるの!? 他に近所に化粧品売ってるお店なんてないよ!?

あわわわ! す、すっぴんで学校に行けとー!?

と、悶えている恥ずかしい場面を三矢君に見られてしまった。

「どうしたの?」

「! み、三矢君・・・・・・・・実は・・・・・・・・」

「・・・・・・・・つぶっは! それだけ? 野田さん綺麗だし、そのままで行きなよ。ね?」

「・・・・・・・・ぐぬぬ・・・・・・・・」

まあ確かに。あの三人にバレたからきつと広まってるし・・・・。

ちなみにバレた日は金曜日。土曜日は学校がなかったので誰にもあつてない。

そして明日が（魔の）月曜日。

仕方ない。ここは腹をくくるしか・・・・・・・・。

「分かったよ・・・・・・・・。これで学校行くよ」

「なにそれ、俺悪いことしたみたいな」

「・・・・・・・・だねっ」

と私たちは笑った。



「・・・・・・・・いよっし・・・・・・・・」

私は「ふー」と大きく息を吐いた。

メイクはしてない（してるけど軽い）。髪は整えた。

「学校行ってやる・・・・・・・・」

低い声で呟きバッグを掴む。

「行ってきます！！」

無駄に元気を入れてそういった。



案の定。ほんっとーに予測通り。

私が教室に入って自分の席にバッグを置くと「嘘!？」や「・・・・・・・・
変わりすぎ」などと声が聞こえる。

そして最低なタイミングで

「野田さん本当にそれで来たんだー」

って指さして笑う三矢君・・・・・・・・。笑うな、お前。

「三矢君がこれで来たっていったんじゃない。」

「そだっけ？」

無責任！

「もういいよ・・・・・・・・。はぁ・・・・・・・・」

私が立ち上がると三矢君が

「どこ行くの？」

もうどーでもいいーでしょー？

「お茶買うの・・・」
なんか逃げたかった。

勿論お茶なんて言い訳だけどね・・・。

メイクと学校（後書き）

なんということか

俺の知らんうちに終わっていた最新話・・・何故・・・？

複雑

私はいつものように学校に行くため外に出た——のだが。

「わわ……」

私の家の前に張り込んでいた様な子が焦りながら逃げ去っていく場面を見た。

「……な、何？」

「それはあれだよ!!」

「あれ？」

学校に着いてから早速友人にそれを話した。

中学からの友人・川谷^{かわや} みえだ。

無論、メイクのことは前から知っていた。 隠してくれていた優しい友人である。

「ストーカーじゃない？」

「ないわー」

私は彼女に即答した。

「ないね」

彼女もそれに即答する。 だよね。

「ま、でも、あんたはさ、元がいいしあるかもよ？」

「ないわー」

「ないね」

そんな時チャイムが鳴った。 みえは他クラスのためいそいそと教室へ戻っていた。

どうやらこの授業は自習らしい。

代理の先生さえ来ないので私たちは自由にやっていた。

携帯がバイブレーションを始める。 みえからだ。

『で、あいつとはどーよ?』

あいつ?

『あいつって誰?』

と返すと間も開けず直ぐ様返ってきた。

『無論アイドルくんだよー』

あ、アイドルくんって……。 たしかにちやほやされ……。
って「どーよ」って!?

『どういう意味!?!』

『もー、恥ずかしがらないでッ 付き合ってる? って聞いたの! 鈍感ッ』

『別にー』

文面では冷静だったけど、内心ありえないぐらい心臓が鳴っていた。

付き合う、という単語。 だってあっちがそう思っていないかもしれないし。

って、私だって三矢君のことそんな……。

そういうことを考えていたら授業が終わった。

そのあと、「変なこと聞いてごめんね」とみえが謝りに来た。

私は「別に」と答えた。

その時、みえはちよつと悲しそうだったけど私自身どんな顔で答えたかなんて覚えてなかった。

ストーカー、じゃないよ

最近——三矢君との会話の数が減った。

別に嫌なわけじゃないけど、なんかちょーっと寂しいかなって思う
私がいた。

みえには、「喧嘩でもしたの？」と聞かれたけど特に思いつくア
テもないし。

ひとつ言えるとすれば、私がメイクをやめてから、男子に絡まれ
るようになった。

追いかけて追い回され逃げ続ける日々が続いたせいか、話す機会も減
った——のだろうか？

きい、と切な気に音を立て扉を開ける。

またあの人だ。 今日目も目が合うなり、そそくさと逃げようとする。

「ねえ」

思い切って声をかけた。 彼は「は・・・？」と足を止める。素

直だ。

「名前は？一緒にこうよ」

「・・・浅間あさま じゅんた 淳太ッス」

「浅間・・・、あ！まさか例の不良君？」

格好は見る限り校則違反のオンパレード。

ワックスで整えた金髪、服やら耳やらにはキラキラ光るアクセサリ
ーが沢山。

そして何と言っても私と同じクラスなのよね。 まあ、不登校で会
ってないけど・・・。

「いつも学校行かないでどこに行ってるの？」

「・・・ゲーセンとか・・・カラオケとか・・・」

「そっかあ・・・ね！今日は出てみない？ねえ？」

「・・・あ、じゃあ・・・その・・・うつす・・・」

・・・みえ!!

「あんたら茜を困らせたら殺すじゃスマネーゾ？」

「すんませーん」

二人は彼女の一言ですんなりと謝る。

みえは私の方へ振り向いて笑顔を向ける。

「うーっす！おは！教室行こうか」

「う、うん！」

「なんだよ、なんだよ・・・」

「川谷さん全部取ってくんだもんなー」

淳太と祐介は二人むなしく教室へ向かった。

冬の

きゅ・・・・・・・・

「「「球技大会iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!」」」

「体育祭の次に嫌な大会名じゃない!!」

「ほぼ半日潰して極寒の日にやるという……。ああ!嫌だわ!憂鬱よ!!!」

「この通りクラスみんなはやる気。やる気。気が滅入るわ……。中学生みたいに作戦決めとかしてるし……。当分私の出番はn・・・」

「野田さんはどうする?」
「来たし。」

「ど、どうって?」
「出る?でない?」

「なな、なんつー選択肢!出ないという手もある」

「いやー美人で目くらまししようぜ?選手決「いや待て待て」ふう、すんどめ成功。」

「運動は苦手じゃないけど、どうせ今年もドッチボールなんでしょ?」

「うん、まあ。なんで?」

「あのボール痛いの」

「率直な感想。本当に嫌なの。あれ。」

「どうしてバレーのボール使うわけ?痛いに決まってる。しかも季節は冬よ……。寒いと痛みも増えるじゃない。」

「それだけ?ね、出てよ」

「やなのー」

「半ば子供みたいに嫌がる私。他にもいるでしょ、運動できる子。」

「うーん、んまあでも来週だしまあいいか」

「出ないからね」
補欠でよろしく。

誰？

球技大会当日、私は補欠だった。

ほぼ元気のいい男子同士で遊んでいるような光景を、微笑ましく見学していた。

ふと目についた人。

三矢君だ。ちょっと声でも掛け……

そう思った刹那、三矢君は私の知らない女子に声をかけられ笑って話していた。

誰？その人は、誰？ 不安ばかりが過ぎる。

「のーださん」

「！」

上から不意に声をかけられる。そのせいで、三矢君への集中は途絶えた。

声の主は浅間君だった。

「何してんの？」

「別にー？……浅間君レギュラーでしょ？行かなくていいの？」

「あ？ああ、ちよっと休憩貰ってさ」

そう、と八つ当たりっぽく素っ気なく返す。

関係ない人に八つ当たっちゃうなんて情けないよね……

「野田さん？」

「え？」

ピピ―、と頭が痛くなる音。一試合が終わったんだろう。

「俺行くね、次だし」

「あ、うん、頑張ってたね……」

手を振りつつ見送る私。

そ、そうだよ！三矢君はど――

あれ？ 居なくなっちゃった……。別に監視してた訳じゃないし……。

「あーっかね」

「みえ……」

「元氣ないわねー。相談だったらあたしに何でもしなさいな」

「ありがと……でも、まだ大丈夫」

「ふーん」

（……あんたの“まだ”っていつなんだろうーね。）

一人で抱え込んだじゃうのかな。私は、もっとみんなを頼らないといけないのにな。



体育館を出て少しした廊下。 自販機の前では――

「ねえ、祐介エ」

「――んだよ」

「最近一緒にいるあの子誰エ？」

「別に関係ねーだろ」

「あるわよオ」

にやにや笑う彼女。

そこへ、誰かが走ってくる音がした――

あれ？ あれってもしかして、三矢君？

私は無意識のうちに居なくなった彼を追っていた。そして、ここですと見つけた。

って、あの女の人誰……？ 体操着きてるってことは同じ学年って

こと？

「三矢君！」

「！」

三矢君は私の呼び掛けで、すぐにこっちを向いた。　　ちよつと嬉しいかも。

「あら。ビンゴ？」

「……………？　えと、どなた……………ですか？」

「うふふ」

彼女は不敵な笑みを残しそそくさと逃げてしまった。
一体、誰だったの？

誰？（後書き）

俺も球技大会やだ

勘違いも程々に。

たたた、とさつき三矢と話していた女子がとあるクラスに戻ってきた。

「あ、裕理ィ、どこ行ってたん？」

「別にどこも行っていないわ」

「嘘言うなあぁ！カレシにでも会いに行ったんじゃないのお？」

「そんなんじゃないってえ」

恥ずかしそうに笑う。

「次試合だよ。応援よろ」

「はぁーい」

□ ■ □ ■ □ ■ □

「の、野田さん？」

「……なに」

あーあ、そうだね、三矢君だって彼女ぐらい居るよねモテるもん。

「ちょ、怖い……、俺試合だし応援頼むよ」

「はいはい」

「……」

私馬鹿みたい。勝手に好きになって、さ。諦めないよね。

「ふはは！振られてやんの、祐介」

「うるせーな…ヘコむんだよ！！」

「はははは」

「ちくしょー、勝ってやる」

ワァァァ、と歓声。

うちのクラスが勝ったみたいだ。べつにどーでもいいーんだけど…。すると、三矢君が私の方へ寄ってきた。

「……野田さん」

「……」

「……の、野田さん何か勘違いしてない？勘違いい？どういう意味よ……」

「……さ、さっき一緒に話してたの姉貴なんだ！」

「はぁ？」

「あ、いたいたー☆」

ベストタイミングでその女子が来た。

「もー、祐介ジュース奢る約束でしょ」

「お金あげるから勝手に行ってろ」

「きびしー☆ あ、あなたが茜ちゃん？ いつも弟がお世話に！あのね、この子っあなたのこ」

「あーねーきー！？」

「……………」

プ、クスス。そうだったんだ。なあんだ、結局勘違いじゃない。

「じゃーね。今度メアド交換しよーよ」

そう笑って走り去っていった。

「……ごめん、先に言わなくて」

「ううん、いいの。こっちこそ勘違いなんかしちゃって」

「そーだ、お詫びのかわりに……」

「？」

耳かして、と言う彼に従う。

「……………」

「……………！んもう！馬鹿にしないの！」

三矢君は嗤って逃げるように走っていった。

『野田さん、好きだよ』

勘違いも程々に。(後書き)

実際諦め悪いのは男だと僕は聞きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574w/>

君と私の秘密。

2011年11月18日04時41分発行